

「先師以上でも以下であつてもならない、先師そのものであること」。これは、父である名誉会長の第二代会長就任時の初志であり、「親子一心」の生きざまでもありました。

今、この初志の重さと厳しさ、そしてこの身にかかる重圧と闘いながら、最初の宏話の筆をすすめておられます。いざ机に向かうと、『論語』の有名な言葉が頭をかすめました。「五十にして天命を知る」という成句です。「子曰く、吾十有五にして学を志し、三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。……」という一節です。今の表現にすれば、「五十歳を迎えて、天が私に下した使命を自覚した」ということでしょう。これまでも『論語』にふれる機会があり、この言葉も知ってはおりましたが、さすがにこの六月以降は骨身にしみて、「天命」という言葉の重さ、その奥深さを痛感しております。

先月、急遽開かれました臨時の理事会において、私は、実践倫理宏正会の第三代会長に就任いたしました。全理事のご推挙を頂戴した以上、荷が重いからといって逃げるわけにはまいりません。進むべき道はただ一つと覚悟を決めて、浅学非才は重々承知の上で、その要請をお受けすることにいたしました。

名誉会長は不断の努力を惜しまず、一切の妥協を許さず、自身に大変厳しい人であります。寸暇を惜し

んで書に親しみ、思索を深めておりました。だからこそ、人びとを魅了してやまない数多の教えを、世に説きつづけることができたのです。それだけではありません。会友の皆さまのために為すべきこととはなにかと常に腐心しておりました。思えば、会長職四十四年の歳月は、克己の日々でありました。

名誉会長は、「人さまを思う」とは、「真の共生」とは、究極の「利他の実践」とはどういうことなのかを、その生き方をおして示しつづけてくれる「人生の師」であります。それ故に、多くの会友諸賢から長年にわたって信を得つづけてこられたのです。不肖の子である私は、果たして後継の任に堪えられるのか、名誉会長の境地には到底たどり着けないのではないか。側近くで見て感じてきた会長職の激務と重圧にこの身がもつのか。そのような思いに駆られたのも事実です。

しかしながら、その時まさに五十歳。名誉会長が歩んでこられた、茨の道そのままを私も辿りつづけるのみ。名誉会長の背中を追い求めて、全身全霊を傾けて実践あるのみ。これが私に下された使命と申すよりは、子としての「宿命」なのだど覚ったのです。

会長職の重責を担うということは、会の歴史全体を引き受け、教えのすべてを引き継ぎ、老いも若きも男女の別なく、すべての会友と手を携えて前に進む。その先頭に立つて実践に励むということです。初代会長と名誉会長、二代七十年間にわたって受け継がれてきた「実践倫理の教え」のバトンを受けて、さらに力強く明日に向かって歩みつづけるというのであります。では、バトンを受けた私は、どこへ向かって進むようとしているのか。そのことをまず、皆さまにお伝えしておかなければなりません。

わが会は、昭和二十年八月、広島に原子爆弾が投下されたとき、その地で被爆した祖父上廣哲彦初代会長が、敗戦で荒廃した人びとの心を立て直し、皆が共に仕合わせになる道はないかと煩悶の末に感得して

生まれたものです。初代会長は、被爆の後遺症も顧みず、各地への倫理普及に奔走いたしました。実践倫理の教えは、行く先々で受容され、燎原の火のごとく全国に広がったのです。しかし、そのさまを見届けるかのようにして、昭和四十七年十月六日、泉下の人となったのです。

涙のかわく間もなく、翌七日に、初代会長の志すべてを継踵した名誉会長は、粉骨碎身して教えを広め、実践倫理の灯をいつそう明るく輝かせたのでした。教えを整理して、その体系化にも努めました。任にあつた四十四年の長い歲月、実践倫理の教えはますます光り輝き、今日に至っております。しかし、その間に時代は大きく変わりました。人びとのライフスタイルも価値観も変わりました。実践倫理の教えは永遠不変のもので、変わることはありません。しかし、社会が変わり、その教えを求める人びとの心も変わったのですから、実践の仕方、普及のあり方は変わらざるをえないでしょう。

生きづらい現代社会を、より善く、より仕合わせに生きるためには、倫理の「すじ道」が必要です。そのことは、昔も今も少しも変わりません。実践倫理の教えが、より切実に人びとから求められているのに、そこに教えが届いていないのだとしたら、教えを広める方法が時代に後れをとっているということですから。実践倫理の教えを、今を生きる人びとの求めに応じて、より具体化してお示しする。すなわち「教えの学び直し」。これが、会長としての私に課せられた責務であると考えています。

もちろん実践倫理の教えを、知識として知っておくことは決して無駄ではありません。人生をより善く生きる指針となるでしょう。しかしそれだけでは、自分を成長させることも、人びとの仕合わせを実現することもできません。実践の伴わない知識だけでは、教えが身についたことにならないからです。

実践倫理の教えは、二代にわたる会長が日常の生活の中で、自ら実践を重ねてつかみ取ったものです。ですから、わが会の教えは実践を通してこそ、その教えの意味、教えの真実が体感できるのです。「実践」はわが会の命です。名誉会長も、講演や著書で「深遠な百の教理よりも実践の一事が大切である」と、繰り返し訴えつづけてこられました。私もその道を外れぬよう、実践の大切さを訴えつづけてまいりたいと思っております。

古代ギリシアの政治家デモステネスは、名演説家として知られ、彼が演説を終えると、人びとはすぐ実践に立ち上がったそうです。デモステネスの言葉には、人を実践に駆り立てる力があつたのです。言葉は、ときに世界を変えるほどの力を発揮します。ものの見方、考え方を、一八〇度変える力もあります。これから私が執筆する「倫風宏話」は、表現の巧拙にこだわらず、教えを具体的な実践に結びつける、デモステネスの熱い言葉のようでありたいと願っています。

会長としての私の役目は、名誉会長がこれまで説かれてきた教え、「実践倫理の教え」を、これまで以上に実践に結び付けていくことです。今を生きる人びとの生活の場でどのように実践に結び付ければよいのかを、お示しすることです。七十周年記念式典で名誉会長が話されたように、そして、会長職四十四年の一日一日がそうであつたように、会長は常に「道を示しつつける」責務があるからです。

そのためには、次の二点を胸に刻んで職務に邁進する所存であります。一つは、言うまでもなく「実践しなければ倫理ではない」ということ、もう一つは「楽しくなければ実践ではない」ということです。

わが会の目標は、すべての人が仕合わせに暮らせる社会の実現です。新しいステージで共に手を携え、励まし合いながら、「随所で主となる」実践に、真摯懸命に取り組んでいこうではありませんか。

最後になりましたが、皆さまのご助力、ご協力を切にお願い申し上げます。筆をおくことといたします。